令和４年度　自己評価及び学校関係者評価書

令和５年２月１７日
江別市立大麻東中学校

１　本年度の重点目標

学びをつなぎ、共に育む　～小中一貫教育への備えを進める～

校区小学校との連携をより一層強め、次年度の小中一貫教育の実施に備えます。これまで培った思いやりの心を基盤に、生徒主体の取組を大切にします。

２　自己評価結果に対する学校関係者評価

分野	評価項目	自己評価		学校関係者評価	
		達成状況	改善の方策	自己評価の適切さ	改善策の適切さ
経営方針の重点	１-① 中学校区における義務教育９年間で目指す子ども像を踏まえて、育成を図る資質・能力の伸長に向けた指導・支援を行っている。	A	今後も中学校区のグランドデザインを共有し、さらに９年間を見通した教育課程の実践に努める。	A	A
	１-② 主体的にいじめ根絶に取り組むなど、寛容や信頼・友情の大切さを理解する生徒を育むため、体験的な学習を通して、生徒の他者を思いやる心情を養っている。	A	体験的な学習の意義を踏まえ、生徒の主体的な活動として行っているいじめ根絶集会を継続するほか、意図的に教育活動を計画、実践していく。	A	A
教育課程・学習指導	２-① 他教科やほかの領域との関連を意識しながら資質・能力の育成に努めている。	A	どのような資質・能力を、どのように伸長させていくのか、その必要性と手立てについて全教職員が理解して実践できるよう、研修を充実させる。また、必要な指導・支援に注力できるよう、働き方改革を推進する。	A	A
	２-② 発表や交流の方法を工夫し、生徒の思考を深めさせている。	B	感染防止対策に配慮しながらも、多様な発表・交流の活動が可能になってきている。表現させ、他者の考えと自分の考えを比較することでさらに思考を深める活動になるように計画、実践していく。	A	A
	２-③ 振り返りを工夫し、生徒の主体的な学びの姿勢を引き出している。	B	教科の特性を考慮しながら、単位時間や単元など学習のまとまりに基づいて振り返りを行い、自らの学習を調整する力を育んでいく。	A	A

	２-④ 授業や活動の中で、意図的に活動場面を創出し、コミュニケーション能力の伸長を図っている。	B	教員相互の授業見学を行ったり、優れた取組をしている教員を講師に研修を行ったりして、全教員が実践に取り組むようにする。	A	A
	２－⑤ 授業や活動の中で、生徒に自己決定・自己選択する場面を意図的に設定している。	A	教科や特別活動の場面で、生徒の主体的な活動を重視し、意図的に場面を設定する。	A	A
	２-⑥ キャリア教育を通して、生徒の自己実現に向けた指導を計画的に行っている。	A	今後も地域の教育資源を活用し、生徒に具体的なイメージを持たせて指導・支援していく。	A	A
	２-⑦ 個別最適な学びや協働的な学びの実現に向けて、授業における個人用端末の有効活用について研修を重ねている。	C	特設の研修だけでなく、ICT 担当者や研究部を中心に、日常的な活用方法の交流や GIGA スクールサポーターの計画的活用を図る。	B	A
	２-⑧ 特別な教育的配慮を必要とする生徒の指導・支援に向けて、視覚的な支援やスモールステップによる指導、肯定的・好意的な働きかけなど、特別支援教育の視点を踏まえた指導・支援を行っている。	A	通常の学級に在籍する特別な教育的配慮を必要とする生徒が増加傾向にあることから、今後も全体研修を通して特性の理解や支援策の共有を図っていく。	A	A
生徒指導	３-① 必要に応じて家庭や関係機関と連携し、SNS 等の活用の指導を行っている。	B	家庭や地域、関係機関との一層の連携を図っていく。日常的な教員による指導のほか、校外の講師による情報モラル教室を学年の発達段階名応じて実施する。	A	A
	３-② 援助希求的態度の必要性を指導し、生徒の自立を支援している。	A	折に触れての指導のほか、教育課程に位置づけた指導を全学年で行っていく。	A	A
	３-③ 健康の大切さについて指導し、通信等を活用するなど、必要な働きかけを行っている。	A	日常的な言葉がけや保健だよりに基づく各学級での指導に加え、保健室来室記録を活用した家庭との連携を進める。	A	A

	３-④生徒に進んで挨拶するとともに、必要に応じて生徒に指導している。	A	状況に応じた柔軟なマナー（元気な挨拶、黙礼、相手を尊重した行動）についても、教師の率先垂範を通して指導していく。	A	A
	３-⑤ 学習規律の定着具合を把握するとともに、その必要性を生徒に考えさせ、自律的な態度を育てている。	A	なぜその行動が必要なのかを伝える丁寧な指導を継続する。小中一貫教育の「スタンダード」も活用して定着を図る。	A	A
その他	４-① 校務分掌をはじめ担当する教育活動をそのねらいと照らし合わせて、教育効果の低い活動を見直したり、別な方法を模索したりするなど、業務改善の視点を持って進めている。	B	勤務時間を意識した働き方を踏まえつつ、生徒の成長にとって最大の効果を上げられる教育活動を模索していく。	A	A

【評価項目の設定、達成状況及び改善の方策に関する学校関係者評価委員の意見】

■１項目のみ自己評価が厳しすぎるという意味合いで、適切さをＢとする。それ以外は自己評価、改善策ともＡである。

■２-⑦に関して、個人用端末が入ったことで急激にＩＣＴ利用の活動に傾くことは好ましいとは限らず、教員の急進的な取組になっていないことに逆に安心感を覚える。高校入試では文字を書くことが求められるし、紙とペンの学習のほうが定着度が高いという実験結果もあり、タブレット利用に関してはまだ全てが実験段階であるということを忘れないでほしい。

■ＳＮＳの指導については、学校がどこまで関わるのか難しい。関われば関わるほど、問題が生じたときに学校の責任にする風潮が強まるのではないかと心配される。保護者の啓発につながる学習会等をとおして、学校よりもスマホを持たせる親御さんに覚悟が必要だということをわかってもらうことが必要なのではないか。

■４-①に関して、学校のやることが減ることなく増えていく現状が、この学校関係者評価の項目を見るだけでもわかる。先生方の負担が増える中、自己評価Ａを目指すことがいいのかどうか疑問に感じる。目標や達成度など、何でも数値化することに意味があるのかどうか、考えなければならない。

【評点】Ａ：よい　　Ｂ：おおむねよい　　Ｃ：ややよくない　　Ｄ：よくない